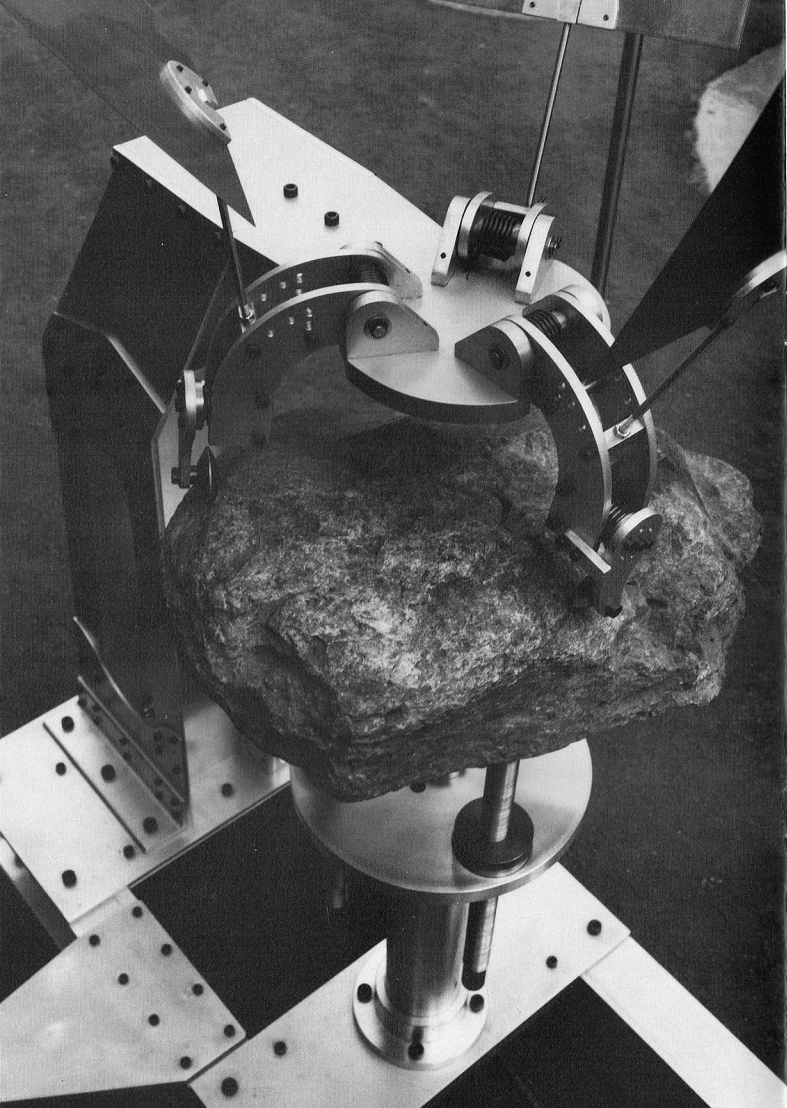


A P R I L 1 9 9 5
T A T S U J I U S H I J I M A

D A I S E I
S T O B I T
S T I B E T
R E T I C
R E T I C

無 用 な 機 械 た ち

T A T S U J I U S H I J I M A



牛島達治 覚書

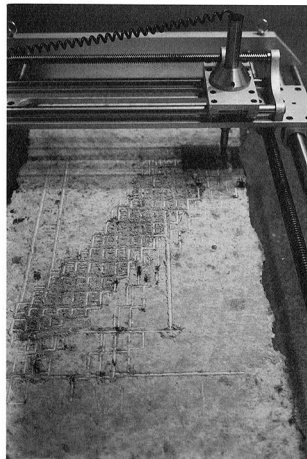
牛島達治さんの仕事場には仏壇があって、その向う側の鴨居にはご先祖の写真が掲げられていた。居間から仏壇の部屋、自室、廊下を経て庭へと仕事の現場は拡張し、鉄製の機械や部品が、アルミニウムの作品と一緒に所狭しと置かれている。それはもう大人のオモチャ箱というしかない夢の工房、手跡と汗かく喜びに満ちた町工場の風情で、そのなかに仏壇と写真は見事に取まり、それらの機械や道具たちが牛島さんとかかわってきた過程を眺めているという態であった。

この5月、東北の山間に織りなす木々の色調は美しく、特に樅の新芽の白みがかった緑がまとめあげる色彩は魔術というしかないものであった。それらの山が日の光に揺らいで風に騒ぐ。モネやボナールはこの光景を表わしてみたかったのかな、と思いながら私はたくさん卒塔婆が立ち並ぶにふさわしい林を探しながら山歩きをしていたのだった。

私が考える卒塔婆とはもちろん、石や金属でできた立体のことだ。

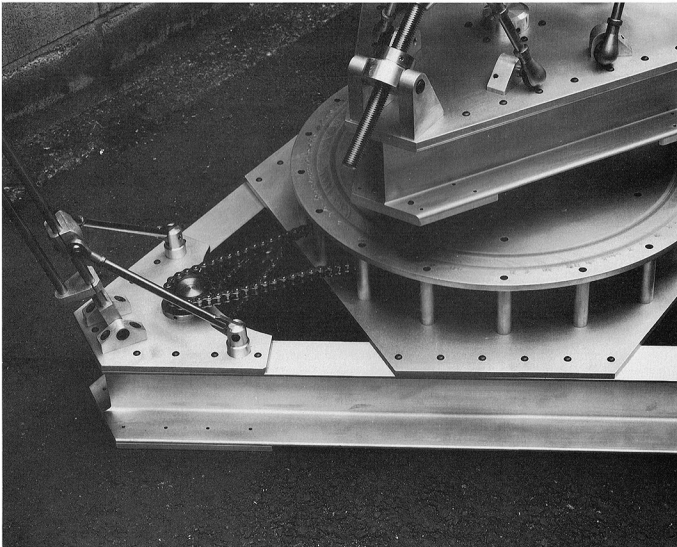
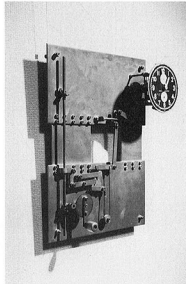
木や風と人間の死のあいだに漂うものとして人間の営みがあるとすれば、現代の作家はモネの時代よりもいくらか人の死に近くなったといえようか。その営みの跡を象するというだけのために、美術は鳥葬の丘に風に鳴る木とともにあるのだとも思える。

おそらく、牛島達治氏の作品はそんな意識のなかから生みだされているのだろう。こわれた機械の集積でもなく、用途をもつ科学の先端にあるわけではない。動いたりするがそれはただ石を刻むだけであったり、たまたま音が鳴るというだけのものである。そこには美術とは離れ、用とは離れた現代の素適な墓碑銘といったようなものを感じる。そのさわやかさが私は好きだ。

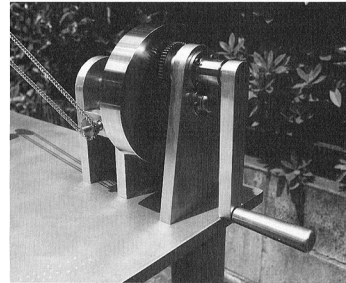


□ 無用な機械たち（世の中には、実に無用と思われる物がある）

最近、その存在に関して聞くこともほとんどなくなってしまったが、電気鉛筆削り機などもたぐいだろう。様々な筆記具がはらんでいる現在、エンピツという物じたい影がうすいが、シャーペンなどが普及する前ですら手動式鉛筆削り機が出現した当時ほどのリアクションがなかったのではないだろうか。実際一本のエンピツがあればよあれよという間に短くなってしまふユーザーの方は便利になったと言うよりもエンピツ屋にハメラレタと言う懸念の方が強かったであろうし、メーカーとしてみれば随分と出荷量が増えたのではないだろうか。私は、当時小学生だったがその早削り技を友と競いあって遊んだ記憶があるが、確かに今思えばエンピツを使うが為削るというより、その機械のほけげた機能を試すが為削るにエンピツがなくなったと言う事実は、否定できない。

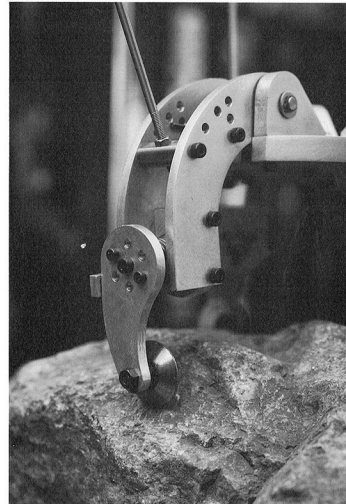


また最近テレビで見たのだが、水戸にある納豆を作っているメーカーが、コンピューターをその製造・開発に活用していると言うものだ。販売等の管理ではない、その納豆と言う商品の開発・改良にそれを入れているのだ。納豆と言えば元祖バイオ食品と言っても過言ではないだろう。今でも幾多の歳月をへて人の味覚により育てられた伝統の食品であるが、しかし、ここにも科学のすそのは延びていたのだ。

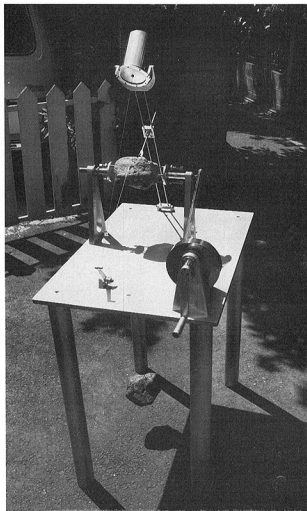


おもに関東を中心とした嗜好でありほぼ東日本に限って支持されていた納豆を西日本までそのシェアを拡大しようというのがそのメーカーのねらいらしいのだが、ここでは種々の実験・研究をおこなっていた。

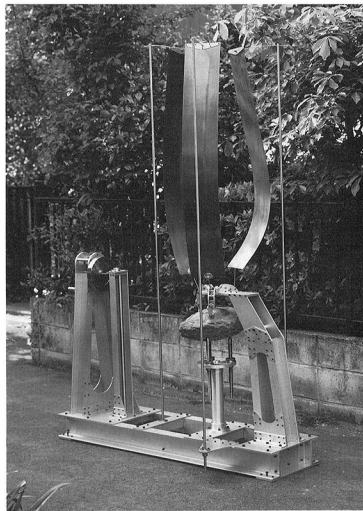
その中でもコンピューターに接続された端末装置、納豆の菌応えを研究するための「納豆せん断試験機」とも言うべきものが私に強い印象を残した。それは、様々な違った熟成過程を経て出来上がった種々の納豆を一粒々々その装置にかけ、せん断のされかた・硬さ等をコンピューターに入力して行く物であった。一粒の納豆をその装置の測定部のスリットを跨ぐ様にセットする（ごていねいにも、そのスリットのふちには滑り止めすべり取付てある）そしてその豆を二分する様に剃刀の刃の様なアタッチメントが取り付けられたアームがゆっくりと豆粒を押し切って行くわけだ。その結果がプリンターから送り出されて来る。その大掛りな装置が、はたして従来の納豆にどれだけ差異を与えてくれるか糸ならとも興味を引くところだ。これらの研究が実を結び納豆の等級序列化が通産省なりどこやらのお墨付きをえて、店頭に並べられている図を思えば驚くもあり、また馬鹿々々しくもある。



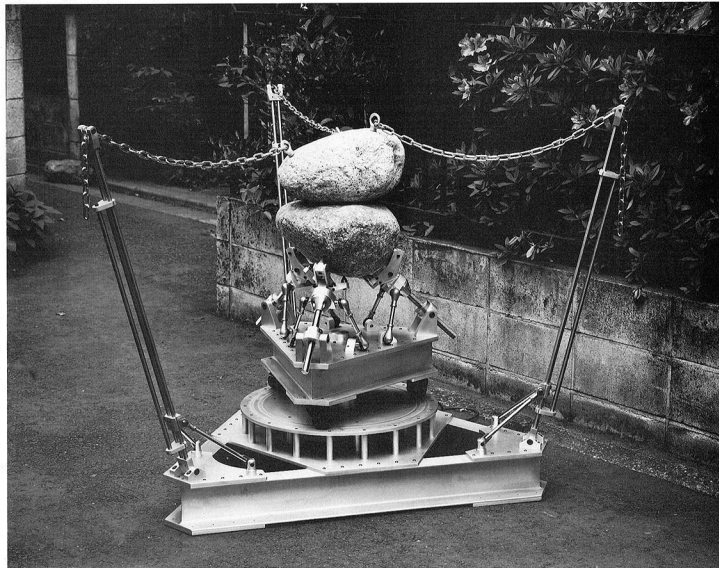
生活のいたる所でこの様な傍目には馬鹿げているとは思えない冗談の様な機械達が存在しているのも確かだろうし、それに資本をつぎこむ企業も存在しているわけだ。一つの面からみると誠に有用・有益である物もそれ以外の角度から見ると、実に無用のデクにみえるといった二面性という特殊性と言うかそんなところが、私の作品を存在させるわけだ。ただ直接的にいつさいの生産性を持たないという差異がある。これは決して交わることはない位相のづれを持った地平から派生しているからだろう。



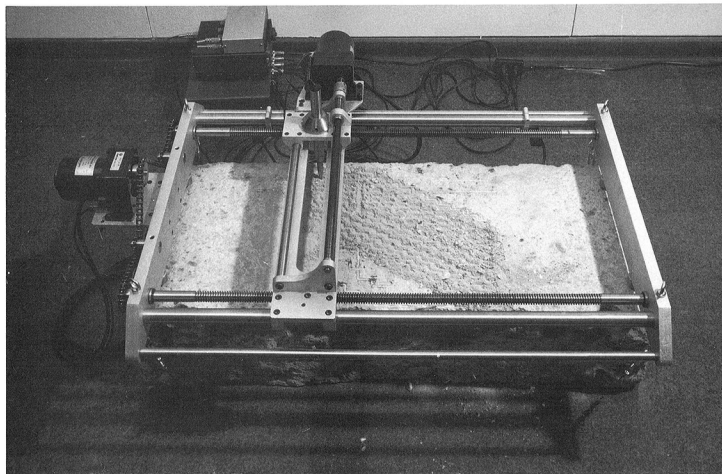
1



2

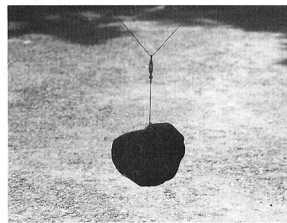


4

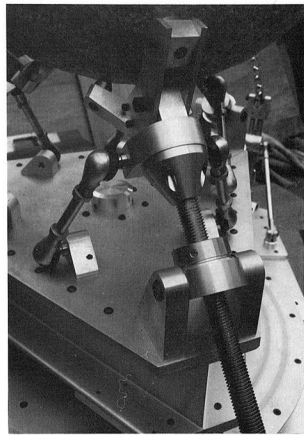


3

- 1— サイバシテナ シゼンニツイテ II 1985年
アルミ・プラス・ステンレス・石
- 2— Stone Convention 1985年
アルミ・プラス・ステンレス・リン青銅・石
- 3— 地中より選ばれ出づるもの——文明 1986年
アルミ・プラス・ステンレス・火谷石・モーター
- 4— キョクノタメニ 1987年
アルミ・プラス・ステンレス・石・モーター
- 5— 1の部分
- 6— 4の部分



5



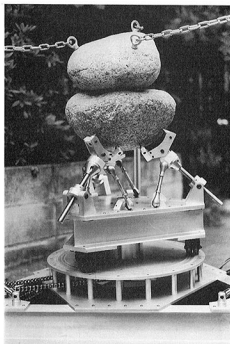
6

□ 岩石 ニヨル 時間浸蝕ノ考察

計画 1

(シンコウチュウノキオク)

岩と岩を、重ねあわせ、上方の岩を回転しないようにし、かつ上下方向には自由に動くことが出来、下方の岩が、何等かの動力により回転する装置を想定する。すなわち岩の上と下の境界面での運動により生じる岩の面の破壊・音・熱・岩のかけら・砂などを生成する非生産的機械である。



計画 2

(カコノゲンソノブツ)

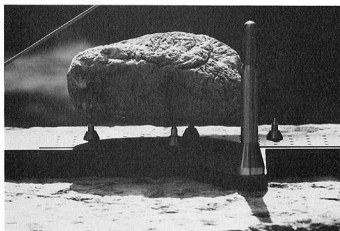
岩盤より割りだした岩かい(火山灰質の泥岩で地中で水分を七割程含んだもの)をコンベヤー状のベースにのせ、その前方に位置する大径の丸のこが、速くはないが力をあまし、多少中心をずらして回っている。岩かいの前端が、回転体の周にぶつかりその厚みで掻き削られるも自重によってベルトに従う。刻々と一定のリズムが二分して行く。これは、ひとつの生産性を有する機械であった。



計画 3

(岩トモ対話テキル風貌ノ男)

プレート(地表より150 mm程うかし水平であること)の上に、数個の岩をたがいに対峙して固定できる一つの定盤を想定する。そして、その上にいくつかの無作為に選んだ岩を固定し、あらゆる物理的方法でそれぞれの関係を測定する。しかし当然のことながら、一様な関係は見出せないだろう。これもただナンセンスなだけの装置-機械である。

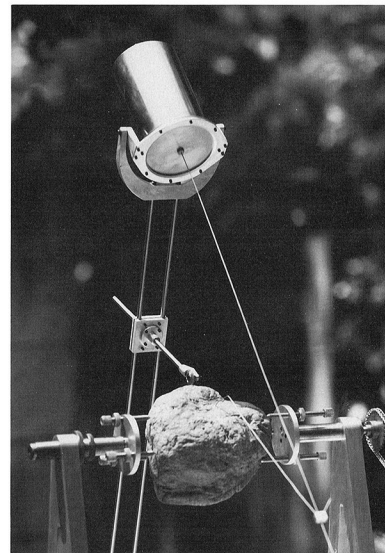
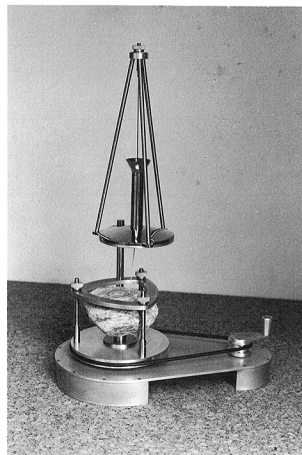


□ 石固有の形態よりある現象(音・etc.)を引きだす装置について

石に対して装置(作品)がひとつの機能を つうじて関係する。

備考

ここで機能とは、方向性を持たないスカラーとしての機能を意味する。すなわち、生産性をもたない(運命としてそれを背負う事を拒絶する)が故に作品として位置する。



基本的発想

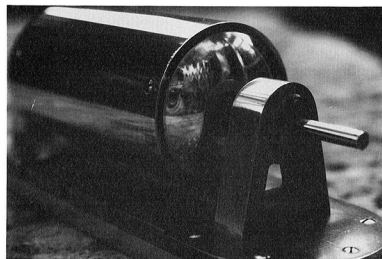
これらの装置と石の関係をたとえるならば

石 = レコードディスク
装置 = レコードプレーヤー
上のような図式になる。

□ 手——もの

科学の最先端。たとえば遺伝子工学の最先端にいる学者ですら、手で考えerと言う話を聞いていることがある。 コンピューターグラフィックの様なビジュアルなどの周辺技術が進歩した現代に於いても、やはり現実には質量のあるモデルを、手でこねくり回す事で思考・考察を深めろらしい。 また、ある研究者の研究状況を見せてもらったが（大まかに言うと、筑波の農業土木研究所で、汚泥の様な流体の物理的性質の研究をしている人のこと）それは、下記の様な過程を持っていた。

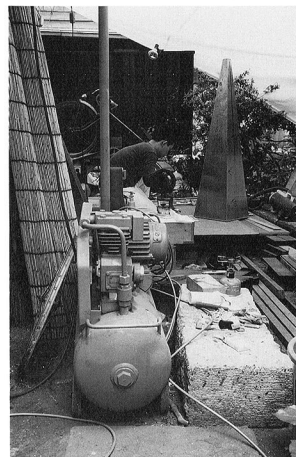
- * 必要な状況の再現
- * 設定状況の観察（顕微鏡による）
- * 状況の経過・過程をモデルに置換え（ピンポン球を何百・何千と接着剤で結合しながら逐一写真に記録してゆく）仮想に裏付けをしてゆく。また、その途上に発見も当然含まれている。
- * 以上を文献として整理し、一般化してゆく。（あくまでも先端にいる研究者どうし、コミュニケーションする程度での一般化であり、生活的レベルでの一般化は、また違った次元になるらしい。そのためのたして彼の研究は、どの様に機能してゆくのか、あるいはしないのか皆目見当つかない。）



その中で感じたのは、彼もまた手で思考するのだと言うことであり、実際手のしめる割合は、相当大きく重要であると言っていた。後になって印象のこっているのは、ピンポン球を単位として出来ている立体、接着剤と手あかの付着したその立体の事である。それは、存在することに必然を持ち、必然が為に構築された物体一形である事を暗に主張していたからだろう。

牛 島 達 治

住所 〒152 東京都目黒区平町2-22-19
TEL 03(717)7496



- | 1958年 | 東京生れ |
|-----------|-------------------------------|
| 1982年 7月 | ZONE(グループ展) 渋谷 東邦生命ギャラリー |
| 1983年 5月 | Bゼミ展(グループ展) 横浜市民ギャラリー |
| 9月 | デザイン フォーラム '83 銀座 松屋 |
| 10月 | テーブル・椅子・コップ展(グループ展) Gアートギャラリー |
| 12月 | ニューヨーク アート展 西武 渋谷 |
| 1984年 1月 | 己展開(個展) 神奈川県民ホールギャラリー |
| 1985年 5月 | 現代日本美術展 東京都美術館・京都市美術館 |
| 11月 | 現代美術の祭典'85 埼玉近代美術館 |
| 1986年 11月 | FROM SOUND(企画展) ストライプハウス美術館 |
| 1987年 5月 | 無用な機械たち(個展) ヒルサイドギャラリー |

HILLSIDE GALLERY

ヒルサイドギャラリー

〒150 東京都渋谷区猿樂町29-18ヒルサイドテラスA-1 電話03-476-4683